10　「都のつと」 ─中世の紀行文

19年度　駒澤大学

★　次の文章は、修行のために東国の諸国を巡り歩いた作者が記した紀行文である。これを読んで後の問に答えよ。

　その後、なほかなたこなたしはべりしに、山といふ所に年久しく住みて、仮にも里などへもでぬありけるを、村の人、ひげ僧など名づけたるとかや、いづれの所のいかなる人ともＡさらに知られず。その所に冬のほどははべりて、春になりしかば、国へア越えはべりしに、Ｂ思はざるに、一夜の宿を貸す人あり。の初めほどなりしに、の梅のやうやうイ散り過ぎたる木の間にめる月の影もびかなる心地ａして、所の様も、松の柱、竹編める垣ｂし渡して、田舎びたる、さる方に住みなしたるも①由ありて見えしに、出であひて、心ある様旅の愁へをとぶらひつつ、世を②いとひそめける心ざしのほどなど、細かに問ひ聞きて、「われも常なき世の有様を思ひ知らぬにはあらねども背かれぬ身のみ多くて、かかづらひはべるほどに、あらましのみにて今日まで過ぐｃしはべりつるにの物語になむ、捨てかねける心の怠りもいまさら驚かれて」など言ひて、「ｄしはここに留まりて、道の疲れをも休めよ」と語らひしかど、末に急ぐことありしほどに、秋の必ず立ち帰るべき由、契りおきて出でぬ。

　その秋ばかりにかの行方もおぼつかなくて、わざと立ち寄りてひはべりしかば、その人は亡くなりて、今日日の法事行ふ③由答へしに、あへなさも言ふ限りなき心地してなどか今少し急ぎて訪ねざりけむ、さしもねんごろに頼めしに、りのある世ながらも、いかｃめと思はＸれけむと、心憂くぞはべりし。さてＤの有様など尋ね聞きしかば、「今はの時までも申し出でｅしものを」とての人々泣きあへりの身、初めて驚くべきにはあらねども、常迅速なるほども、いまさら思ひ知らＹれはべりき。

＊知識徧参＝禅僧が諸寺の高僧から教えを受けるため諸国を巡ること。「知識」は、ここでは高徳の僧のこと。

＊絆＝出家などに際して、人の心や行動の自由を束縛するもの。

＊七日の法事＝人の没後七日目に行う法事。

＊偽りのある世ながらも＝人の言葉に偽りのある世ではあるが、ということ。

＊空頼め＝あてにならないことを期待させること。

＊後の人々＝この世に残された人々。

＊有待の身＝仏教語で、人間のこと。

＊無常迅速＝仏教で、死が予告もなく突然に襲ってくることをいう語。「無常」は、ここでは死のこと。

問１　傍線（１）「ほどなりしに」の中の「し」と同じ品詞のものを、本文中の二重傍線ａ～ｅの「し」の中から一つ選べ。

　　ａ　雅びかなる心地して

　　ｂ　垣し渡して

　　ｃ　過ぐしはべりつるに

　　ｄ　暫しはここに留まりて

　　ｅ　申し出でしものを

問２　傍線（２）「旅の愁へをとぶらひつつ」の意味内容として、最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

　　ア　旅の苦労を慰めながら

　　イ　旅の準備を心配しながら

　　ウ　旅の風情について尋ねながら

　　エ　旅の費用の援助を申し出ながら

　　オ　旅先で亡くなった人の供養をしながら

問３　傍線（３）「背かれぬ身」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

　　ア　風流な生活に執着心を持たない身

　　イ　世の無常を理解しようとしない身

　　ウ　俗世をのがれようとしてのがれられない身

　　エ　日常の生活に嫌気がさしてしまった身

　　オ　世間から取り残されてしまった身

問４　傍線（４）「今夜の物語」とあるが、家主が最も関心を抱いた話題とはどのようなものだと考えられるか。最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

　　ア　作者と家主が信仰する仏教の教義

　　イ　作者と家主が抱いている家族への愛情

　　ウ　今まで巡ってきた諸国の高僧たちの教え

　　エ　作者が出家を決意するに至った強い思い

　　オ　雅びな月の光と興趣を催す風流な庭の様子

問５　傍線（５）「かの行方もおぼつかなくて」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

　　ア　ひげ僧がどこに住んでいるのか知りたくて

　　イ　一夜の宿とした庭の秋の様子を見たいと思って

　　ウ　急ぎの用事も済んでいない状態のままにして

　　エ　家主がその後どうしたのか気になって

　　オ　家主との約束に間に合うか不安に思って

問６　傍線（６）「などか今少し急ぎて訪ねざりけむ」を現代語訳せよ。

　　［

］

◎問７　次の１～４について、本文の内容に合致しているものはアを、合致していないものはイを、それぞれ解答欄に記入せよ。

１　作者は、東国を巡る途中、秩父山のひげ僧の元に長年留まって修行したが、やがてある年の春に上野国へ越えて行った。

２　作者は、一夜の宿を貸してくれた家主を再び訪れた時、既に亡くなっていたことを知り、人の命のはかなさを痛感した。

３　家主は、作者が約束を守らなかったことについて、偽りのある世の中だから仕方がないとあきらめていた。

４　後に残された人々は、家主が臨終に際しても作者が立ち寄ることを待っていたと、泣く泣く作者に語って聞かせた。

１＝〔　　　〕　　２＝〔　　　〕　　３＝〔　　　〕　　４＝〔　　　〕

問８　『都のつと』は、南北朝時代に成立した紀行文学である。『都のつと』以降に成立した作品を、次のア～オの中から一つ選べ。

　　ア　大鏡　　　　　イ　去来抄　　　　　ウ　方丈記

　　エ　古今著聞集　　オ　堤中納言物語

【確認問題】

１　波線部ア「越え」・イ「散り過ぎ」の動詞の活用の種類を答えよ。

　ア（　　　行　　　　　　　　　活用）

　イ（　　　行　　　　　　　　　活用）

２　波線部①・③の「由」の本文中の意味として適当なものを、それぞれ次から選べ。

　ア　縁　　　イ　風情

　ウ　事情　　エ　理由

　①〔　　　〕　　③〔　　　〕

３　波線部②「いとひそめける」を漢字で表記するならば、どれが適当か。次から選べ。

　ア　厭ひ初めける　　イ　厭ひ染めける

　ウ　いと潜めける　　エ　居訪ひそめける

４　波線部Ｘ・Ｙの助動詞「れ」の文法的意味として適当なものを、それぞれ次から選べ。

　ア　完了　　イ　受身

　ウ　尊敬　　エ　自発

　Ｘ〔　　　〕　　Ｙ〔　　　〕

【補充問題】

５　傍線部Ａ「さらに知られず」の意味として適当なものを、次から選べ。

　ア　まったく知ることができない

　イ　もっと知ることはできない

　ウ　あらためて知ることはできない

　エ　その上理解されない

６　傍線部Ｂ「思はざるに」の意味として適当なものを、次から選べ。

　ア　急に　　イ　思いがけず

　ウ　突然　　エ　気にかけず

７　傍線部Ｃ「空頼め」とあるが、作者は家主にどんな約束事を述べていたのか。その内容となる箇所を本文中から十二字で抜き出せ。

　［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

８　傍線部Ｄ「終」とほぼ同義の二字の語を、本文中から抜き出せ。

　［　　　　　　　　　　］

９　第二段落には、作者の心中表現として鍵かっこをつけることができる箇所がある。その最初と最後の三字をそれぞれ抜き出せ。

　［　　　　　　　　　　］〜［　　　　　　　　　　］

【解答】

問１　ｅ

問２　ア

問３　ウ

問４　エ

問５　エ

問６　ＡどうしてＢもう少し急いでＡ訪問しなかったのだろうか

評価の基準　Ａ＝８／Ｂ＝２

問７　１＝イ　２＝ア　３＝イ　４＝ア

問８　イ

【確認問題】

１　ア＝ヤ行下二段活用　イ＝ガ行上二段活用

２　①＝イ　③＝ウ

３　ア

４　Ｘ＝ウ　Ｙ＝エ

【補充問題】

５　ア

６　イ

７　秋の頃必ず立ち帰るべき由

８　今は

９　などか～れけむ

【現代語訳】

　その後、やはりあちらこちらへ諸寺の高僧から教えを受けるため諸国を巡っておりましたときに、秩父山という所に長年住んで、ほんのわずかでも人里などへも出ない聖がいたので、村の人は、ひげ僧などと名をつけたとか（いうことであったが）、どこの在所のどのような人であるともまったく知ることができない。その（聖の）所に冬の頃はおりまして、春になったので、上野国へ越えましたが、（その途中で）思いがけないことに、一晩宿を貸してくれる人がいた。（陰暦）三月の初めの頃だったので、軒端の梅が次第に散り過ぎようとしている木の間から（見える）霞のかかった月の姿も優雅な感じがして、家の様子も、松の柱や、竹を編んだ垣根を作りめぐらして、びた、そのような場所にことさら住んでいる有様も風情があるように見えたが、（そうしているうちに）家の主人が（家から）たまたま出てきて、思いやるように（私の）旅の苦労を慰めながら、出家することを考え始めた心情などを、詳細に尋ね聞いて、「私も無常の世の有様を理解していないわけではないけれども、（俗世を逃れようとして）逃れられない（この）身の束縛ばかりが多くて、出家せずにおりますうちに、願望ばかりで今日まで暮らしておりましたけれども、今夜の（あなたからお聞きした）お話で、（世を）捨てることができなかった心の怠慢にも今改めて（自ずと）気づいて（しまいました）」などと言って、「しばらくはここに滞在して、（旅の）道中の疲れを癒してください」と親しく話したが、先に急ぐことがあったので、秋の頃に必ず（この家へ）戻ってこようということを、約束しておいて出立した。

　その（年の）秋の（陰暦）八月の頃に、あの（宿を借りた家の主人の）その後のことが気がかりで、わざわざ立ち寄って（その家を）訪問しましたところ、（家の者が）その主人は亡くなって、今日は（没後）七日目の法事を行うという事情を答えたので、今さらどうしようもないという気持ちも言葉にしきれない思いがして、どうしてもう少し急いで訪問しなかったのだろうか、あんなにも一途にあてにさせたのに、（人の言葉に）偽りのある世ではあるが、どれほどにあてにならないことを期待させられたと（主人は）お思いになっただろうかと、心苦しく思いました。そこで臨終の有様などを尋ね聞いたところ、「臨終のときまでも（あなたが訪ねていらっしゃったかどうかを言葉に出して）申し上げていたのに」と言って、この世に残された人々は互いに泣いていた。人間（のはかない命というもの）は、今さら驚くはずではないけれども、死が予告もなく突然に襲ってくることも、今改めて思い知りました。